# 大気の旅人

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大気の旅人

【Ｎコード】

Ｎ５１７６Ｆ

【作者名】

ｉｍａｉｗａ

【あらすじ】

大気になれる少年と不思議な生き物ヒョイとの旅。

**（前書き）**

連載候補？　のテスト作品。

「さらば、母上！」

「ポックル～」

ポックルは振り返らなかった。何が詰め込まれているのか、大きく膨れ上がった布の袋を肩に担ぎ、家を出て行った。
その表情には全く迷いは無かったが、だからと言って目的や目指す場所がある訳でもない。
ただ、母親の庇護の下、武器屋の息子として一生こじんまりと生きて行く事に耐えられなくなったのだ。
目指すものが無いが、家を出たからには一人で生きていかなければならない。
食べていかなければいけなかった。当然の成行きである。
ポックルは思った、食べていく方法の方向性はいらないと。
川の水を啜ろうが、盗みを働こうが、相手を打ち倒して物を奪おうが、それは生きて行く手段であると彼は割り切っていた。ただその中に唯一働くという選択は除かれていた。

平原に長く伸びる土の細い道をひたすらどこかへ向って歩く。
視界の先に何も見えない、ただ、永延と薄く禿げた平原の大地が続き、地平線が雲ひとつ無い青空と平原とを二分していた。
そんな時一台の馬車が、遠目にこちらへ向ってくる。
ポックルはそれを目にして直ぐに決断した。

――あの馬車から金目のものを頂こう

ポックルの普段平たくぼんやりした目に心なしか鋭さが宿る。

袋から徐にダイナマイトを取り出すと、導火線に火打石をかち合わせ火をつける。
場所はもうそこまで来ていた。目測だが、大体の距離を把握すると馬車の進路に仁王立ちしてダイナマイトを高々と持ち上げた。

「おらよ！」

ダイナマイトは馬車の手前に落ちるべく放物線を描いて飛んでゆく。
次の瞬間、ポックルは進路外に跳ね退いて、地面に突っ伏した。
馬車の手前でダイナマイトが轟音とともに弾けると、衝撃を伴って炎が千々に迸る。
馬はその風熱の衝撃に胴を後ろの馬車にたたきつけられ、馬車も斜め後ろに激しく放り投げられた。

「さてと……」

少時の後、ポックルは横倒れた馬車にゆっくり歩み寄っていった。
薄い緑地に転がる馬の遺体、一瞬で絶命したようで既に動かぬ躯と化していた。
それより少し先に馬車が転がっていた。
黒い馬車には諸所に火が残ってはいるが、あの爆風をまともに受けた割りには、それほど損傷が無かった。頑丈で強固な材質で作られているのだとポックルは思った。
ポックルは多少警戒しながら、空を仰ぐ横倒れた馬車の扉の上に飛び乗った。
格子型の扉の隙間から中が映し出される。
ポックルは内部に隈なく目を一巡させたが、誰も乗っていなかった。
想定していない事態に、ポックルは焦りの色を隠しきれない。

「ようやってくれるわ、兄ちゃん」

ポックルは体を瞬時に硬直させた。声が直ぐ後ろから聞こえてきたのだ。

喉をゴクリと言わせた。

しかし、そんな時にもポックルの右手は佩剣の柄をがっちり握り締めていた。

ポックルのあるイメージを心の内で立てていた。相手は自分の後ろに立ち、銃口か剣の切っ先を胸か頭に向けているに違いない。ただ、気配を感じさせずに背後を取った事を考慮に入れると、並の使い手ではないことは確か。下手に動くとやられる――ポックルはそこまで短い間に悟ると、柄から手を離して馬車の扉に突っ伏した。

「ほぉ、分かってるようやね、兄ちゃん、それが利口や」

馬車の扉に顔を押し付けながら、ポックルは声にならない声で呟いていた。

そしているうちにも、ポックルの姿がどんどん透明に大気に溶け込むように消えていく。

「なんだ！？」

ポックルは馬車の上空に漂っていた。

そこから馬車を俯瞰して、敵の正体を見極めようとしていた。

しかし、馬車の扉の上には誰の姿もなかった――ように見えるが、何か黄色い小動物のようなものが跳ね回っていた。

――あれは一体……

ポックルは意を決して、大気となった体を元の体に瞬時に戻すと、馬車の上空で剣を抜いて柄を両手で握り締め、切っ先を黄色い謎の小動物に向けて突き降ろした。
風きり音を捉えたのか、黄色の小動物は横に跳ねてそれを交わした。
馬車の扉に突き刺さった剣を直ぐに引き抜くと、目を配る事無く右側に横薙ぎに一閃させた。その刃をも軽々と避けられる。手ごたえが無いのだ。しかし、刀身に小さな重みが増したのをポックルは感じ取って、即座に視線を剣に這わせる。

――なんだこいつは……

ポックルは刀身の上にのっかる小動物の姿を目にして動揺していた。
一見ねずみのようにみえる外見、円らの瞳が二つ黄色い毛むくじゃらの体から覗いている。
しかし、ねずみと明らかに違うのは、小さなウサギの足のようなものがついていて、目の上にはギザギザの触覚が二本あるところだ。
そして――

「兄ちゃん、いきなりご大層やな、死ぬかと思うたやんけ、馬車も壊れた事やし、あんたが今日からワテの木偶やで」

そう小動物が言い放つと、頭のギザギザの二本の触覚の先がぶるぶると震えて先が重なる。　瞬く間にその交差部分が白く煌き、一条の白い光がポックルめがけて放たれた。
この至近距離でポックルは避ける事ができず、まともに白い光をその体に受けてしまった。

「な、なんだこれ！？」

小動物の目の下に突然切れ目が走る。
それは今まで体毛に隠されて、見えなかったが小動物が笑ったために露出したようだ。
言わば口だった。

「だから、木偶光線や、兄ちゃん、体動くか？」

ポックルはそう言われて初めて、体の動きが何か見えない力に封じられているのが分かった。

「よし、じゃあ俺の木偶よ、馬車壊してくれたんだし、徒歩で平原かけてもらうからな！」

ポックルは自分の意志とは関係なく体が動き、馬車の上から平原に飛び降りる。
肩にはさっきの小動物が乗っていた。
どこかへ向って歩き始めていた。ポックルはこの束縛から逃れようとどんなに体を揺すっても、それは解けない事を確認した。すると、ため息を深くついて、発声が出来るか試してみる。

「君の名前なんていうの？」

「ワテか？　ワテはヒョイだ、お前は？」

「ポックルだ」

挨拶を交わすと、ヒョイが鼻で笑った気がした。
それをつとめて無視して、澄ました顔でポックルは操られるがまま、平原をとぼとぼ歩かされていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5176f/

大気の旅人

2011年2月2日02時49分発行